

六祖及び六祖壇經と道元禪師

搏林皓堂

一

『雪齋頌古』を提唱し垂示・評唱・著語を附して『碧巖集』を造つた一代の詩僧圓悟克勤(西紀一一三五寂)が、六祖大鑑慧能禪師(六三七—七一三)を贊した語に『稽首曹谿眞古佛、八十生爲善知識』(廣錄卷二十六)といふがある。わが高祖道元禪師が六祖慧能を古佛中の古佛として推稱することは圓悟に勝るとも劣ることはない。故に禪師も右の六祖を恭敬讚歎する圓悟の贊を『正法眼藏古佛心』及び『永平廣錄』(卷)に引いて、曹谿古佛に心からなる尊敬を拂つて居られる。然し禪師が六祖を推稱して止まぬことは此一點に限るのではなく、實に屢々諸方に見出される。併乍ら禪師は如何なる根據によつて六祖をかくも推稱して止まぬのであるか、言ひ換へれば禪師は六祖の偉さをどこに見出すか。六祖の言行及び教説を傳ふる如何なる文獻の如何なる記事を眞としてこれを推稱するか。六祖の言行及び教説を傳ふる語錄としては『法寶壇經』たゞ一つである。而るに禪師はこれを偽書として斥ける。從つて禪師は『壇經』を根據として六祖を推稱せ

ぬものとせねばならぬ。然し六祖の傳と教説とを紹介するものに『壇經』の外、門人法海等集の『六祖大師緣起外記』、編者は不明であるが傳教大師が將來したと云はる、『曹谿大師別傳』があり、更に六祖滅後二百五十餘年に編集された『宋高僧傳』(西紀九八八贊寧編)、及び是れより十六年後すなはち景德元年(一〇〇四)に道原が撰に成る『景德傳燈錄』(傳燈以後のものは省く)がある。而らば禪師は是等に據つて六祖を推稱するのであるか、又は等の諸傳と『壇經』の關係は如何。筆者の興味は此點にあるのであり、本文の中心もそこに在る。

二

先づ初めに道元禪師が『六祖壇經』を何故に偽經とするかと云ふことから論を進める。『正法眼藏四禪比丘』に
佛法いまだ其要見性にあらず。七佛、西天二十八祖、いづれのとろか佛法たゞ見性のみなるとある。六祖壇經に
見性の言あり。かの書これ偽書なり。付法藏の書にあらず。佛祖の兒孫、またく依用せざる
書なり。

とあつて、禪師が『壇經』を偽經と斷する根據はその見性を力説する點にある様であるが、此文を文字通りに見てよ
いか否かは後段の問題として、更に今一つ偽經と断する根據かと思はれるものを拾つてみると、『正法眼藏卽心是佛』
に六祖の弟子慧忠(七七五寂)が南方から來參した僧を接する語に

把_ニ佗壇經_一改換。添_ニ釋鄆譚。削_ニ除聖意。惑_ニ亂後徒。豈_ニ成_ニ言教。苦哉吾宗喪矣。(傳燈卷二十八)

と云ふがある。これは當時南方の禪者達が先尼外道の心常相滅の見を以て佛法と誤り『六祖壇經』の見佛性もかくの

如しと爲すを、六祖の直弟子たるの立場から慧忠がこれを破したるものであるが、禪師が『卽心是佛』にこの慧忠の語を引いたのは、當時流布の『壇經』が六祖の言教を其まゝ傳へて居らぬことを併せて斷じたるものとして、彼の『四禪比丘』の『壇經』否定の文と照應して見るべきものであらう。とまれ是に依て『壇經』の原型が失はれたのは成立直後であり南方からであると云ふことが分る。而して、道元禪師の『壇經』否定の明白な根據は六祖の直弟子慧忠の此言葉と、一經の主流をなす見性説との二に在ることになる。而し此事に就てなほ一つの見逃がしてはならぬ問題がある様に思はれる。それは『壇經』に於ける坐禪論である。『壇經』の坐禪論は記述に前後はあるが諸本みな載する處であつて、流布本は第五坐禪章に見へてある。これに依れば

此門坐禪元不著心。亦不著淨。亦不_ニ是不動_一……。

善知識。何名_ニ坐禪。此法門中無障無礙。外於_ニ一切善惡境界。心念不_レ起名爲_レ坐。內見_ニ自性不動_一名爲_レ禪。善知識。何名_ニ禪定。外離_レ相爲_レ禪。內不_レ亂爲_レ定。外若著_レ相内心即亂。外若離_レ相即不_レ亂。本性自淨自定。只爲_ニ見_ニ境思_ニ境即亂。若見_ニ諸境_ニ心不_レ亂者。是真定也。善知識。外離_レ相即禪。內不_レ亂即定。外禪內定。是爲_ニ禪定_一。

又有_ニ迷人。空心靜坐。百無_ニ所思_一。自稱爲_レ大。此一輩人。不可_ニ與語_一。爲_ニ邪見_ニ(般若第二)

等とあつて極めて平明に坐禪を開示してゐると思はれる。殊に心に著せず淨に著せずと云ひ、無障無礙と云ひ、乃至「本性自ら淨く自ら定まる」と云ふ邊り、道元禪師の本證の坐禪と同一であると云ふべきであるが、仔細に是を觀察するとき、此文による限り六祖の坐禪觀と禪師のそれとは幽蓋合するとは云へぬ様である。『壇經』に依れば坐と禪と

は内容を殊にし、坐とは一切の外境に對して、心念の起らざることであると云ふのであつて、それは止觀の止と云ふ如き趣きがあり、内自性の不動を見るを禪と爲す、と云ふが如きは觀の趣きがある。これを六祖に於てはそういうふ意味ではないとすることが六祖を信する見方ではあらうけれども、少くとも斯く感ぜしめる文字である。而るに道元禪師は坐禪を以て貫き坐禪のみを強調した祖師であるが、坐と禪とを區別して別義ありとせられることもなく、止觀を聯想せしめる如き言説はない。併し乍ら此坐禪章の開示は、なほ比較的無難である。流布本行由第一の「論_二見性_一不_レ論_二禪定解脫_一」と云ふが如き、坐禪よりも見性が重要である、見性を得るならば坐禪の如き問題でないと云ふ様にもひびく。又流布本の頓漸第八、高麗本南北頓禪第七（宋本同）及び『傳燈』の、志誠を接して神秀の坐禪を批評し、「住心觀靜是病、長坐拘_レ身於_レ理何益」と云ふが如き、身の坐よりも心の坐を勧むるが如き語調である。又流布本の宣詔第九、高麗本唐朝徵詔（宋本同）の

薛簡曰。京城禪德皆云。欲_レ得_レ會_レ道。必須_ニ坐禪習定。不_レ因_ニ禪定。而得_ニ解脫_一者未_ニ之有_一也。未審師所說法如何。
師曰。道由_レ心悟。豈在_レ坐也……。
（別傳は記述
に小異あり）

の如き、果して六祖直授の語とするならば、少くとも六祖は坐禪を強調する祖師ではないとの感を與へる。勿論道元禪師の主唱する坐禪は悟を得る爲めの其れではないから、「道は心に由て悟る、豈に坐に在らんや」と云つても敢えて異とするには當らないが、口を開けば只管打坐と繰返へす道元禪師に比し幾分の相違あることを思はしめる。但し右二文は燉煌本、興望寺本、大乘寺本等の『壇經』には省かれて居るから或は後人の竄入かも知れないが、『別傳』及び『傳燈』もまた是れを記して居る所から見て即断も出來ない。しかし『壇經』を通じて感ぜられる所は、其の坐禪觀

が道元禪師に比して低調であることゝ、幾分相違點があるかに思はるゝ點にある。これ禪師が『壇經』を以て悉く六祖の言教と認めぬ隠れたる重要な點ではないであらうか。

以上一經の主流を爲す見性説と慧忠國師の竄入説と坐禪觀との三方面より道元禪師の『壇經』偽經説を觀察したのであるが、此事は禪師が六祖を贊仰するに、六祖の唯一の語錄たる『壇經』を根據とせぬと云ふことに一應落付く譯である。然らば禪師が六祖に稽首する根據は如何なる文獻に在るであらうか。此事を檢する爲めに禪師が六祖の如何なる行持、如何なる言説を推稱してゐるかを見、且つ其等が前記諸文獻の何れに據るものであるかを見るとしよう。

III

道元禪師が頗る敬服して居ると思はれる祖師は其の筆致からして『正法眼藏一顆明珠』に於ける玄沙師備（八〇八）と、『正法眼藏恁麼』其他に於ける六祖慧能とである。玄沙は南臺江の漁夫であるが、出漁中はからずも親愛なる父を水中に失つて忽然發起して雪峰に投じたる祖門の英傑であつて、禪師はこれを不釣自上の金鱗と推稱して居る。又六祖は市に薪を賣る因み『金剛經』に引轉せられて黃梅に參じたる發心の高士である。觀無常を菩提心となし、「未だ名利を抛たざれば未だ發心と稱せず」（用心集）と云ひ、觀無常と抛却名利とを學道の生命とする道元禪師がかゝる經歷の兩祖を推稱して止まぬは理の當然である。禪師の發心觀は此兩師の求道の勝蹟に依つて成つたと云てもよいであらう。然らば六祖の發心求法が禪師に如何に強き感銘を與へたか。『恁麼』を見るに左の如く述べてある。

六祖のむかしは新州の樵夫なり。山をもきはめ水をもきはむ。たとひ青松の下に功夫して根源を截斷せりとも、

なにしてか明憲のうちに從容して照心の古教ありとしらん。藻雲たれにからぬ。いちにありて經をきく。これみづからまちしところにあらず。佗のすゝむるにあらず。いとけなくして父を喪し、長じては母をやしなふ。しらずこのころもにかかりける一顆珠の乾坤を照破することを。たちまちに、發明せしより老母をして、知識をたづぬ。人のまれなる儀なり。恩愛のたれかかるからん。法をおもくし恩をからくするによりて棄恩せしなり。これすなはち有智若聞、卽能信解の道理なり。いはゆる智は人に學せず、みづからおこすにあらず、智よく智につたはれ、智すなはち智をたづぬるなり……。

これは六祖の發心に深く感銘した禪師が、六祖が發心したのではなく、六祖の渾身を作る智——般若の大智が自ら躍り出で、『金剛經』の智に合體したのであつて、如何なる環境もこれを阻止し得ないと云ふのであるが、此の記事の根據を求むれば『六祖壇經』（流布本ならば行由第一、他本ならば其に相當する箇所）『外記』『別傳』『宋高僧傳』乃至『傳燈』何れもこれを載せてゐる。即ち諸傳一致である。

次に禪師が六祖の發心に就て提唱せられる記事は『正法眼藏佛性』の第五段に見られる。曰く、

震旦第六祖曹谿山大鑑禪師そのかみ黃梅山に參ぜしはじめ五祖とふ。なんぢいづれのところよりかきたれる。六祖いはく嶺南人なり。五祖いはく、きたりてなにごとをかもとむ。六祖いはく、作佛をもとむ。五祖いはく、嶺南人無佛性いかにしてか作佛せん』この嶺南人無佛性といふ嶺南人は、佛性なしといふにあらず。嶺南人は佛性ありといふにあらず。嶺南人無佛性となり。いかにしてか作佛せんといふは、いかなる作佛をか期するといふなり。およそ佛性の道理あきらむる先達すくなし……。六祖いはく人有南北なりとも佛性無南北なり。この道取を擧して

句裏を功夫すべし。南北の言まさに赤心に照顧すべし。六祖道得の句に宗旨あり……。

禪師の提唱はなほ續くのであるが、要するに發心に於て異彩ある六祖はその求道の最初に於ても常人に異なるものがあるとの意味で筆が運ばれてゐる。而して此記事は『傳燈』には省かれてゐるが何れの『壇經』も載せてゐる許りでなく、『別傳』『宋高僧傳』ともに載せてゐる。(但し)『宋高僧傳』は無佛性とは云つてゐない。以上に依つて禪師が六祖を推稱する根據は第一の發心に就いて云ふならば『壇經』『別傳』及び『宋高僧傳』である。

四

次に道元禪師が六祖を推稱する第二の點を其の教説に求めて其の根據を見ることにする。禪師が六祖に深く稽首することは其教説が特に勝れて居ると考へられる爲であらう。而らば禪師は其をどの點に見出すか。その(一)は南海の法性寺に於ける二僧の、風動旛動の論争を一言の下に決裁して信服せしめたと云ふ事である。『恁麼』によれば

第三十三祖大鑑禪師未剃髮のとき、廣州法性寺に宿するに、二僧ありて相論するに、一僧いはく旛の動ずるなり。

一僧いはく風の動ずるなり。かくのことく相論往來して休歎せざるに六祖いはく、風動にあらず、旛動にあらず、仁者心動なり。一僧きよてすみやかに信愛す。……この道著は風も旛も動もともに心にてあると六祖は道取するなり……。

これに依れば禪師の六祖に稽首する第一の點は「仁者心動」と云ひて、禪師の解釋の如き意味に於て裁斷したと見る所にある。禪師の道力が偉大である丈に六祖の語を深遠なる意味に解釋し、反つて其が爲に更に六祖に稽首すると云

ふ形に成つてゐる。然して此記事は燉煌本及び大乗寺本以外の『壇經』及び『別傳』『宋高僧傳』『傳燈』等に等しく載する所である。

(一) 次に禪師は六祖が印宗(六二七)^{七一四}を度する語にその偉大さを認めて居られる。『永平廣錄』卷六に

印宗等作禮已復問。忍大師付囑如何指授。曰唯論_三佛性_二不_レ論_三禪定解脫_一。無漏無爲。又問何故不_レ論_三禪定解脫_一。曰爲_ニ是_一法_二。不_ニ是_一佛法_二。佛法是不_ニ之法_一。又問何名_ニ不_ニ之法_一。曰法師講涅槃經明_ニ佛性_一。是不_ニ之法_一。……蘊之界之。凡夫見_ニ一_レ。智者了_ニ達其性無_ニ一_レ。無_ニ一_レ之性。即是實性。故知佛性乃不_ニ之法也_一。……印宗聞已。起立合掌。……此居士者肉身菩薩也。

これに依れば禪師が六祖に稽首する第一の教説は、『涅槃經』を特意とする印宗に對し、反つて同經の中心教義たる佛性を端的に示して餘蘊なしとする點にあることとなる。「正當恁麼時は衆生の内外すなはち佛性の悉有なり」(正法眼藏_佛)と云ひ、法界はさながらに佛性の皮肉骨髓となす禪師としては、佛性を不_ニの法と斷ぜられた六祖に深く稽首せざるを得ぬことは當然である。而して此の印宗を度するの記事は、禪師が否定する『壇經』『別傳』以外に典故を求めるを得ない。(燉煌本、興聖寺本及び大乘寺本『壇經』には此事はなく、『傳燈』は極めて簡略に記する丈である。)

*註。「論佛性」は『壇經』及び『傳燈』では「論見性」となつてゐる。本經が見性を力説するからこれを斥けるとなれば、禪師は「論見性」不_レ論_ニ禪定解脫_一」を引いて六祖を推稱することは出來なくなる筈である。

五

(三) 六祖の教説として禪師が深く稽首する第三は、「修證は無きにあらず、染汚することは得ず」と云へるそれ

であつて、禪師は『正法眼藏徧參』『洗淨』『永平廣錄』等諸所にこれを引いて提唱せられてゐる。且らく『廣錄』によれば左の如くである。

南嶽懷讓禪師。初參^ニ曹谿^一之時六祖問。汝什麼處來。讓曰。嵩山安國處來。祖曰。是什麼物恁麼來。讓罔^レ措。終至^ニ八年^一……祖曰。汝作麼生會。讓曰。說似一物即不中。祖曰。還假^ニ修證^也無。讓曰。修證不^レ無。染污即不得。祖曰。只是不染污。卽諸佛之所護念。汝亦如^レ是。吾亦如^レ是。乃至西天諸祖亦如^レ是。
（卷）

此教説は禪師が深く感銘する所であるものゝ如く『普勸坐禪儀』にも「修證自不染汚」と云はれ、『正法眼藏洗淨』には「佛祖の護持しきたれる修證あり。いはゆる不染汚なり」と前呈して右因縁を引き、更に

しかあれば身心これ不染汚なれども、淨身の法あり。淨心の法あり。また身心をきよむるのみにあらず、國土樹下をもきよむるなり。國土いまだかつて塵穢にあらざれどもきよむるは、諸佛之所護念なり。佛果にいたりてなほ退せず廢せざるなり。その宗旨はかりつくすべきことかなし……。

と布衍して居られる許りでなく、禪師一代の教學は此を根底として成立してゐると云ふてもよい。禪師は只是不染汚、諸佛之所護念、汝亦如是、吾亦如是、乃至西天諸祖亦如是に六祖の眞古佛なる所以を發見するものゝ如くである。而して此事は流布本及び高麗本『壇經』並に『傳燈』ともに記載する所であるが、燉煌本等の『壇經』並に『別傳』『宋高僧傳』には省かれてゐる。なほ流布本『壇經』の末尾に附する元代の宗寶の跋には、此記事を載する機縁第七は自分が書添へたと云つてゐるから、宋代の禪師の見た『壇經』には此記事は無かつたことになる。果して然らば禪師は此の記事を何に據つて知られたであらうか。畢竟淨祖の口傳とするか『傳燈』によるとする外はない。

六

(四) 更に禪師が推稱する六祖の教説は法達を度する因縁に見られる。是は『正法眼藏法華轉』及び『看經』に詳細に提倡せられてある。その要旨は『法華經』を三千部よんだと自負する法達に、本經の宗旨たる因縁出世の旨を説き、因縁とは唯一大事であり、唯一大事とは即佛知見であり、開示悟入であり、佛知見は汝が自心なること教へ、更に「心迷法華轉、心悟轉_ニ法華、誦久不_レ明_レ己」、與_レ義作_ニ羅家、無念念即正、有念念成_レ邪、有無俱不_レ計、長御_ニ白牛車_ニの偈を示したのであるが、法達から重ねて佛智の尋思度量に非ざる所以、三車四車の同別、一二三權實の質問があつて、『法華經』は從劫至劫、手不釋卷であつて誦念にあらざる時なき旨が説かれる。こゝに法達は『法華』の本旨を悟つて踊躍歡喜し「誦經三千部、曹谿一句亡、未_レ明_ニ出世旨、寧歇_ニ累生狂、羊鹿牛權設、初中後善揚、誰知火宅内、元是法中王」の偈を呈しその證明を得ると云ふ一段の因縁である。道元禪師は六祖の偈を解釋し六祖の眞意は心迷心悟ともに法華の轉と爲すものとし、

(心迷法華轉の) その宗旨は心迷たとひ萬象なりとも、如是相は法華に轉ぜらるゝなり……法華轉はすなはち無二亦無三なり。唯有一佛乘にてあれば、如是相の法華にてあれば、能轉所轉といへども一佛乘なり。……しかあれば心迷をうらむることなけれ。汝等所行是菩薩道なり……。心悟法華轉といふは、法華を轉ずるといふなり、いはゆる法華のわれらを轉ずるちから究盡するときに、かへりてみづからを轉ずる如是力を現成するなり。この現成は轉法華なり……。(正法眼藏)

と云はれ、かく解釋せらるべきものとして法達に與ふる六祖の偈を讀歎するのである。而して此の法達を接得するの記事は廣略の差はあるが何れの『壇經』にも齊しく載する所であり、『傳燈』もまた法達の章を設けてこれを傳へてゐる。(其他の諸傳には此事はない)。

七

(五) 次に禪師は六祖が門人行昌(即ち志徹)に佛性を説けることを以て、六祖の高き道力を示すものとして稽首して居られる。『正法眼藏佛性』によれば

六祖示門人行昌云、無常者即佛性也、有常者即善惡一切諸法分別心也。(第六)

と述べ、更にこれを提唱して

いはゆる六祖道の無常は、外道二乘等の測度にあらず…………しかあれば草木叢林の無常なるすなはち佛性なり。人物身心の無常なるこれ佛性なり。國土山河の無常なるこれ佛性なるによりてなり。阿耨多羅三藐三菩提これ佛性なるがゆへに無常なり。大般涅槃これ無常なるがゆへに佛性なり。

と云はれ、かくの如き深密なる垂示、無常を佛性と斷するが如きは、六祖の道力に非ざれば言ひ得ざる所となすものである。而して此記事は燉煌本、興聖寺本、大乘寺本には見えないが其他の『壇經』には載せてゐる(流布本頤漸第
高麗本南頓
北漸第七)。而して『壇經』以外の諸傳中此事を紹介するものは『傳燈』だけである。

(六) 次に禪師は六祖の悟道偈を『正法眼藏古鏡』に引て提唱せられてゐる。いはく

第三十三祖大鑑禪師、かつて黃梅山の法席に功夫せしとき、壁書して祖師に呈する偈にはく、菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處有塵埃……大鑑高祖の明鏡をしめす、本來無一物何處有塵埃なり。明鏡非臺これ命脈あり。功夫すべし。明々はみな明鏡なり。かるがゆへに明頭來也明頭打といふ。……いはんやかどみにあらざる一塵の盡十方界にのこれらんや、かどみにあらざる一塵のかどみにのこれらんや、しるべし盡界は塵刹にあらざるなり。ゆへに古鏡面なり。

であつて其の提唱も通途の説ではない。吾々はこれに依つて六祖の偈の深さを又更に教示せられる。而し此偈の轉句は一般に傳へられる如く本來無一物であつて、燉煌本『壇經』の如く『佛性常清淨』ではない。従つて禪師が『壇經』に依つて此偈を採つたとしても燉煌本でないことは明かである。而して諸傳には此偈は載せてないが『傳燈』もまた一般に云ふ所の「本來無一物」の偈を以て其の悟道を傳へてゐる。而らば禪師は燉煌本以外の系統の『壇經』又は『傳燈』に依つて右二つの教説を擧げて六祖を推稱したことになるやうである。

(七) 最後に禪師が六祖の言説として最も推稱するものは『正法眼藏嗣書』「佛道」並に『古佛心』の

曹谿あるとき衆にしめしていはく、七佛より慧能にいたるに四十佛あり、慧能より七佛にいたるに四十祖あり。である。これは一見平凡の文字の如くであるが、師資證契即通の端的を述べたるものであつて甚深なる意味を持つものとせられる。故に「この道理あきらかに佛祖正嫡の宗旨なり」と云ふのであるが、その正嫡の宗旨なる所以は『古佛心』に

七佛ともに向上向下的功德あるがゆへに、曹谿にいたり七佛にいたる。曹谿に向上向下的功德あるがゆへに、七

佛より正傳し、曹谿より正傳し、後佛に正傳す。たゞ前後のみにあらず、釋迦牟尼佛のとき十方佛あり。青原のとき南嶽あり。南嶽のとき青原あり……あるひは聖蹟せざるは不疑にあらざるべし。かくのごとの功德あることを參究すべきなり。

と云ふにある。かくの如き甚深の義あるものとして禪師は今の六祖の語を深く推稱するのである。併乍ら此の六祖の教説は六祖を紹介する如何なる文獻にも見出しえない。『正法眼藏涉典錄』及び『續貂』には『壇經』を出典とするけれども、『壇經』には過去七佛より六祖に至る祖號を列して嗣承を示す丈で前記の如き文言はない。禪師が『壇經』の意を取つて述べたとせざる限り全く典故を見出すことが出來ぬ譯である。

八

以上道元禪師の著述の中から不世出の古佛の行持と言教として禪師が特に推稱する六祖のそれを擧げ、且つ其等の典故を求めたのであるが、前述の如く殆んど總てが『壇經』若しくは各種の六祖傳中に見出される處である。而るに各種の六祖傳は廣略の小異はあるとしても、何れも皆『壇經』と相違なく、多くは是れを要約したかと思はるゝもの許りである。就中『景德傳燈錄』は諸傳中もつとも詳細を極むるものであるが、『壇經』に基いて撰したと思はれる點が多く『壇經』そのまゝの處が多い。果して而らば道元禪師が引用して以て推稱する六祖傳並に教説は『壇經』を一步も出でぬことゝなる。茲に於てか禪師は自ら偽經と斥け、付法藏の書にあらずと認する『壇經』を通して六祖を推稱して居ると云ふ矛盾を來す事になる。茲に至つて吾々は道元禪師の『壇經』偽經説を再吟味せなくてはならぬこ

となる。思ふに禪師は本經の全分を悉く偽經と斷ずるのではなく、玉石混淆の書とするものであらう。従つて佛祖眼を開けし擇法眼を具する者が是を取扱ふ限り、六祖金口の親言を摘要し得ると成すものであると見るべきである。此事は禪師が『楞嚴』『圓覺』を偽經と斥けつゝ其斷片を引用し、これを辯ずるに「たとひ偽經なりとも佛祖もし轉舉しきたらば、眞箇の佛經祖經なり。親會の佛祖法輪なり」（正法眼藏）とせらるゝに徵して知ることが出来る。茲に於てか禪師は『壇經』を否定しつゝ、而も其中から金口の眞言を見出し得るとして、前記の如き言行と教説を諸所に摘要拈提したのであるまいかとの結論に達するのである。従つてこれを端的に云へば、禪師は『壇經』を六祖の語錄と肯定しこれに基いて六祖を推稱してゐると云ふに落付くのである。

九

果して然らば今一度先に保留した『正法眼藏四禪比丘』の『壇經』偽經の祖語を見直さねばならぬこととなる。『四禪比丘』が『壇經』を否定する根據は、『嘉泰普燈錄』（一一〇一編）の編者正受が孤山智圓の語を引いて、道儒佛三教は鼎足の如く一致なりと説き、「儒の教たる其要誠意にあり、道の教たる其要虛心にあり、釋の教たる其要見性にあり。誠意や、虛心や、見性や名異なれども體を同じうす」と云へる爲であつて、禪師はこれを破して「佛法いまだ其要見性にあらず」と断じ、次いで「六祖壇經に見性の言あり、かの書これ偽書なり、付法藏の書にあらず、曹谿の言句にあらず、佛祖の兒孫また依用せざる書なり。正受、智圓いまだ佛法の一隅をしらざるによりて、一鼎三足の邪見をなす」と云つたものである。故に寧ろ正受智圓の三教鼎足説を破する爲めに『壇經』を引合ひに出した觀があ

るのであつて、若し正受等が三教一致を説くに見性を以てせなかつたならば、或は『壇經』を否定せられなかつたかも知れない。こゝでは禪師は見性をひどく嫌つて居るが、見性とは見佛性であり、見法性でありまた見佛でもあるから、『涅槃經』の「欲レ知ニ佛性義、當レ觀ニ時節因縁」を諸方に提唱し『正法眼藏佛性』乃至『見佛』の卷を説く禪師としては、見性否定は頗る矛盾の如くではあるが、禪師の提唱する明見佛性は性相相對の性を見徹することではない。禪師の主唱する見佛は超佛越祖であり殺佛である。而るに世人の見性は暗裡に那一物を執する見性である。これを否定し佛祖屋裡の明見佛性を力説するものは『正法眼藏佛性』である。かの『佛性』の深遠なる教説に接する者は其が世俗の見性と天地懸隔するを發見する。『壇經』の見性説がやゝもすれば世俗の見性説の理解に依つて扱はれることは禪師の默止し得ない處である。これ禪師が『壇經』を六祖の言句に非ずと言はざるを得ない所以であらう。これを要するに禪師は『壇經』の全分を六祖の眞説と認めないにしても、大體に於いて六祖の言教を傳ふるものとして自らも是を依用し、更に具眼者のこれに則ることを承認するのであまいか。而して前述の如く禪師が『壇經』の坐禪觀に少しも觸れぬことは、茲に於てか一層我々の注意を引くことになる。(昭和一四・一・一〇)